特別原稿

『第14回学生生活実態調査』から読み解く現代学生像

今尾 真
明治学院大学学生部長・学生生活実態調査分科会委員

日本私立大学連盟の学生委員会では、２０１４年に「第14回学生生活実態調査」を実施した。この調査は１９６７年に始まり、４年ごとに、加盟大学の学生を対象として、社会・経済状況の変化に応じて多様化する学生の特徴やニーズなどを的確に把握し、加盟大学によるきめ細かな学生支援の一助とするために行われているものである。質問項目は、調査の継続性を考慮し、客観的で数値化できる内容設定により、経年変化の比較分析を重視しつつも、時代の変化を踏まえた調査項目の見直しや追加などをして、９分野（後記）にわたって設定されている。

今回の調査は加盟１２０大学の学生を対象に実施し、６７９１名から回答を得た（回収率64・2％）。調査の分析結果は、今回の調査を含む3回分（２００６、２０１０、２０１４年）の時系列比較という形式で『私立大学学生生活白書２０１５』に取りまとめた。以下では、今回の調査の特徴を要約し、そこから浮かび上がる現代学生像を明らかにし、その支援の在り方および課題について述べることとする。

また、今号の座談会では、『私立大学学生生活白書２０１５』を取りまとめた分科会委員が、学生支援の現場の実感を踏まえながら、白書から読み取れる現代学生像と今後の学生支援の在り方について意見交換を行った。併せてお読みいただければ幸いである。

まず、今回の調査にあたっては、①「留学」と学生生活の関係（白書第Ⅵ章）②「朝食」と学生生活の関係（白書第Ⅲ章の質問項目）を新設し、③身についた力・身に

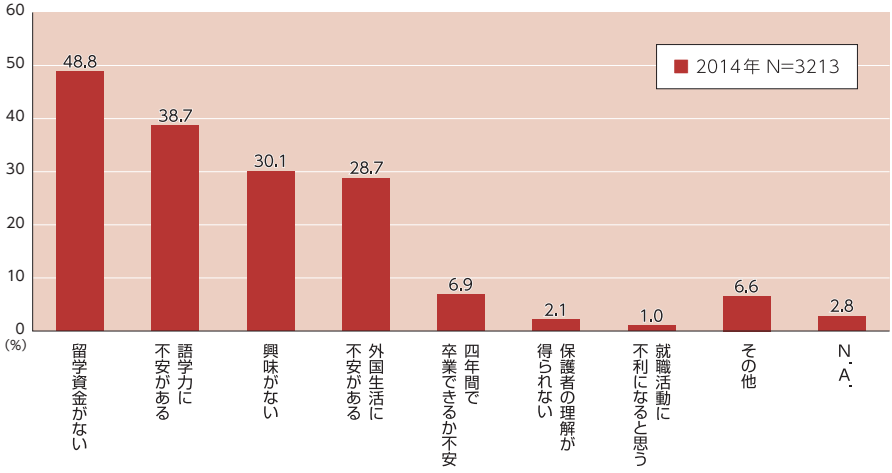

図1　留学を考えない理由（降順）

つけたい力（白書第Ⅸ章の質問項目）を加えた3つを白書の特集ページで取り上げた。

①では、留学経験率は8・3％とそれほど高い数値ではないが、女子学生（11・4％）が男子学生（5・5％）より、人文科学系学生（12・3％）が理・工系学生（3・6％）より、留学率が高いことが明らかになった。また、留学未経験者の3割に留学意向があり、特に1年生でその傾向が強かった。他方、留学意向のない学生の理由としては、「留学資金がない」「語学力に不安がある」などが挙げられており、その対策が望まれるところである。（図1）

次いで、②の質問では、「朝食を毎日とる」と回答した学生が60・7％、「朝食をとらない」と回答した学生が8・8％であった。朝食を毎日とる生活習慣が充実した大学生活につながるとの回答が多く、両者の間に相関関係があることが判明した。100円朝食や学生食堂の早朝営業などを実施している大学もあるが、学生に朝食をとらせるための何らかの方策を検討することには一定の意義があるといえよう。（図2）

さらに、③については、質問した多くの能力について、学年が上がるにつれ「身についた」と感じる学生の割合

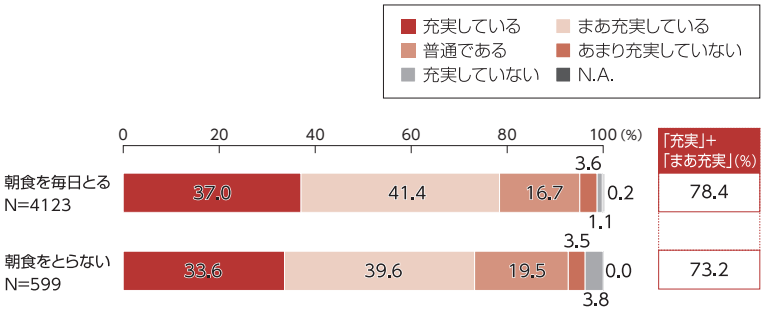

図2　学生生活の充実度

が高くなっており、大学における取り組みに一定の成果が上がっていると分析できよう。他方、語学力に関しては、「身についた」と実感している学生の割合が、1年生と4年生を比較すると数値が低下している。また、今後「身につけたい力」として語学力が上位にあることは、大学における語学教育に対する見直しが求められることにつながるだろう。

次に、前回調査と共通の質問に対する回答の中から、今回の調査結果で特徴的な項目を中心に分析・評価の概要を述べることとする。

「進学目的・理由／充実度／期待」（白書第Ⅰ章）に関しては、「大学卒の学歴が必要」との進学目的が、これまでの3回の調査で常に1位を占めた（今回調査では56・0％）。また、大学選択の理由としては、「自宅からの通学が可能だったから」「自分の実力（偏差値）に合っていたから」が上位で、大学選択に無理をしない傾向が見られた。さらに、所属大学に対する充実度や期待について、満足度は3回の調査で漸増傾向であった（学生生活の充実度についても、4分の3の学生が充実していると回答）。他方、所属大学の施設・サービスへの要望として、ほぼ半数の学生（49・0％）が「学生食堂の充実」を挙げていることが明らかとなった。この点は、前々回（44・0％）や前回（43・2％）から5ポイントあまり上昇しており、前述の「朝食を毎日とる」との回答にも関連して、学生食堂の充実が今後大学の取り組むべき重要課題であることを示している。

続いて、「経済」（白書第Ⅱ章）に関しては、1カ月の収入・支出の両方で前回調査より金額が増加した。また、収入については、「家族などからの援助」が1カ月平均2900円減少し、逆に、「アルバイト・定職収入」が1カ月平均3500円増加したという調査結果から、世間で

は昨今経済状況が上向きになりつつあるといわれているものの、学生を取り巻く環境はまだまだ厳しい状況にあることがわかる。これを裏付けるデータとしては、奨学金について、「返還の必要のない奨学金の充実」が要望のトップであることが3回の調査でも変わらず、奨学金受給率（前々回32・3％、前回39・9％、今回42・6％）およびアルバイト・就労率（71・5％、69・3％、73・3％）が増加傾向を示していることが挙げられる。こうした結果は、学生の親が依然として厳しい家計状況の中で学生を大学に送り出していることの現れであり、各大学としても給付型の奨学金の充実を図ることが急務である。（図3）

「ライフ（大学生活）」（白書第Ⅲ章）については、課外活動参加時間が3回の調査で微増傾向にある反面、睡眠時間が減少しつつある。「興味・関心」についても、3回の調査で、「大学の勉強」「クラブ・サークル活動」「資格の取得」の順にトップ3となったが、前回と比べ、前二者は微増したのに対し、「資格の取得」が微減となった。なお、「大学の勉強」は連続して上昇しており（前々回21・5％、前回22・9％、今回23・1％）、学習に対する意識が向上していることがわかる。これは、「大学生活で大切なこと」の項目として、「よい成績をとること」「講義・ゼミ・研究会などにきちんと出席すること」の増加と軌を一にしている。他方で、「興味・関心」の項目では、「友人との交際」が前回より大幅に低い数値となったことに加え、「大学生活で大切なこと」の項目に関して、「よい友人・先輩を得ること」も低くなっており、その代わりに「人脈をつくること」が増加して

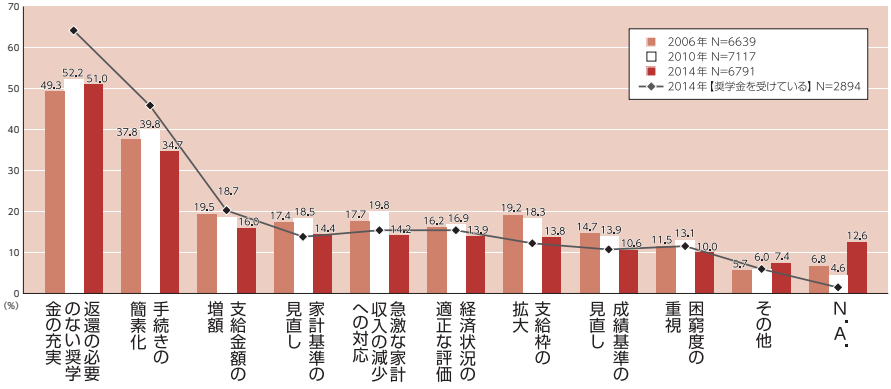

図3　奨学金制度への要望（降順）

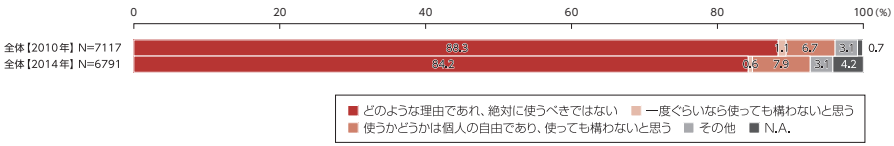

図4　薬物の使用について

いる。この結果から、昨今の学生は就職活動や卒業後に役立ちそうなことに対して、より真面目に取り組もうとする傾向があるといえよう。また、喫煙率も3回連続で減少し続け（16・4％→12・2％→8・9％）、2006年の半分近くまで減った。ただし、前回調査から盛り込まれた「薬物の使用」については、自己責任での容認派が増えており、危険な兆候を示している。各大学とも、いっそうの注意喚起と教育指導が望まれよう。（図4）

「正課教育」（白書第Ⅳ章）および「正課外活動」（白書第Ⅴ章）については、以下の特徴が明らかになった。まず、「正課教育」では、「正課教育の満足度」が経年比較で増加傾向にあり、「講義への希望」「教育内容・方法への期待・要望」は全体的に数値が低く、大学が学生のニーズにきめ細かく対応してきた成果ととらえることができる。また、「正課外活動」では、課外活動への参加率が年々増加してきた。しかし、参加目的については、「友人を得る」と「学生生活を楽しむ」の項目が1・2位を占めていることに変わりがないものの、今回調査ではそれぞれ4・7ポイント、5・5ポイント減と大幅に数値が低下した。これは、前述の「ライフ」における「興味・関心」項目の「友人との交際」が低下していることとも関連して、学生の「孤立化」現象が進んでいるのではないかと思われる。

「不安・悩み」（白書第Ⅶ章）については、「自分のことを何でも話せる友人」が「いる」と回答した学生が3回連続で増加している。また、「不安・悩みの内容」の1位も、連続で「就職や将来の進路」となっており、1年生でも1位にランクされている。こうした傾向に対しては、社会人としての基礎的な面も含めて、大学として低学年の段階から一貫してフォローしていく体制づくりが不可欠であろう。次に、「相談相手」では、友人への相談が減少し、家族への相談が増加しつつあり、また「大学の教職員」「学生相談室」の利用は低いという結果も明らかになった。不安・悩みとして就職や将来の進路、学業が多く挙がるものの、相談相手として大学が活用されていない現実が浮き彫りとなっており、これに対する改善が望

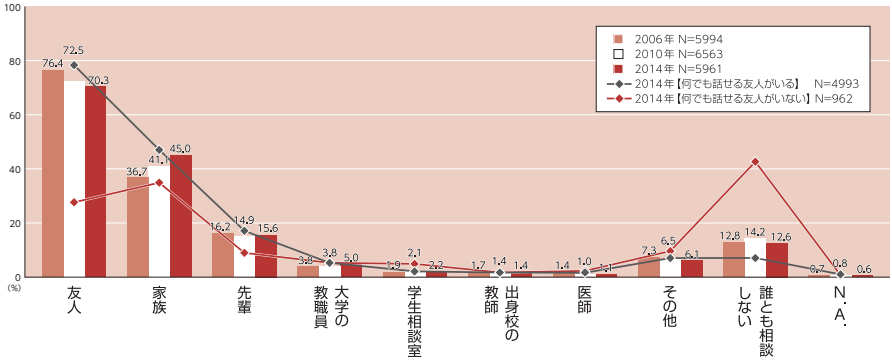

図5　不安・悩みの相談相手――全体と何でも話せる友人の有無（降順）

まれるところである。（図5）

以上を総括すると、今回の調査結果からは、大学での学習に対する真摯な姿勢の向上、所属学部・学科への満足度や学生生活の充実度の漸増、正課教育に対する満足度の向上および正課外活動への積極的参加の増加などの特徴が挙げられ、そこから学生の「真面目化」の傾向がより顕著になっていることがわかった。これはまた、学生のニーズに各大学が対応し、きめ細かな支援を実践してきた成果の一部と評価することができよう。しかし、他方で、奨学金の受給率・受給額が増加傾向にあり、給付型の奨学金への要望が高いことも明らかとなり、各大学として経済面でのより積極的な学生支援が引き続き重要課題となっている。

なお、今回の調査を振り返っての所感として、調査結果から浮き彫りとなった学生の「真面目化」傾向（あるいは「安定化志向」）は、裏を返せば学生の主体性や能動性が欠落しつつあることの証左であり、「没個性的」な学生の増加の兆候を示しているのではないかという不安を感じた次第である。今後、各大学は、単に時代の変化に対応した学生のニーズを抽出して支援するだけではなく、そうした学生像の背後にあるものを的確に分析・把握し、各大学が目指す人材育成とそのための支援・教育を実践する時期に突入したように思われる。

『私立大学学生生活白書２０１５』は、日本私立大学連盟ホームページ内の「資料・刊行物」からダウンロードできるので、広くご活用いただきたい（http://www.shidairen.or.jp/publications）。

座談会

『第14回学生生活実態調査』から読み解く現代学生像とこれからの学生支援

調査結果からうかがえる「真面目で現実志向的」な学生像

難波　学生を取り巻く環境は急速に変化しており、大学は、多様化する学生の特徴やニーズを的確に把握し、きめ細かな学生支援をすることが求められています。

日本私立大学連盟では、１９６７年から４年ごとに、加盟大学の学生生活実態調査を実施してきました。このたび、２０１４年に実施した第14回調査の結果が『私立大学学生生活白書２０１５』としてとりまとめられました。本日は、調査および分析を担当された委員の方々にお集まりいただきました。

調査結果から読み取ることのできる現代の学生像や、どのような支援体制が求めら

れているのかなどについて話し合っていただき、今後の魅力ある大学づくりの一助にしたいと思います。

北條　２０１０年度に行った前回の調査と今回の調査を比べると、基本的な傾向は変わっていないという感じがしています。例えば、現実志向的というか真面目というか、そういう傾向が非常によく表れています。経験的に言っても、授業にきちんと出席する学生が大変増えています。また、大学進学の目的として一番回答が多いのは「学歴の必要性」で、「専門性を身に付ける」もかなりポイントが高く、前回の調査結果とほとんど同じです。大学生活で大切にしていることは「講義やゼミ、研究会などにきちんと出席する」という答えも同様です。一方で、数は多くないものの、年次推移的に非常に増えてきたのは「大学で良い成績を取ることを重視」という学生です。

真面目ではあるがその主体性やいかに？

北條　また、課外活動に参加している学生が７割と、かなり増えています。勉学と課

外活動を両立しようという傾向が強いところにも、学生の真面目さが表れていると感じました。授業などに真面目に出席する一方で、課外活動などにも熱心という学生の姿がそこにあるのではないかと思います。

ただ、そこで本当に主体的に行動しているのかという話になると、本当のところはよく分からない面があります。例えば、教育社会学の分野では、最近「大学生の生徒化」という言葉がよく使われます。自分のことは自分で考え行動し、その責任を持つという従来型の大学生、自立した大学生のイメージではなく、高校の延長線上の学校に通っているという意識の大学生の姿が指摘されています。こういった傾向に、今回の調査結果が合致したようにも思えます。

学生はボランティアやインターンシップなどに積極的に参加しているように見えますが、一方で大学がそういったものを授業に取り入れる動きも進んでいます。したがって、学生が本当に主体的なのかどうかは議論の余地があると考えています。

平山　今回の調査結果を見ますと、概して予想通りのイメージであり、私が日常接している学生の姿と大きくかけ離れたような数値はないと感じました。

経済状況と留学をはじめ目立つ「二極化」と「性差」

平山　私が関心を抱いたのは学生の経済状況です。日本の大学は世界の中でも学費が高いうえに、奨学金が不十分であり、しかも公的な給付型奨学金はありません。今の日本の学生の経済状況は世界でも厳しいほうだと思いますが、調査結果では、経済状況が「やや苦しい」と「苦しい」が想像よりも少なかったことから、二極化しているのではないかとの印象を持っています。実際に、豊かな学生は外国に行く、あるいはサークル活動も自由にやっているようです。他方では、毎日、夜遅くまでアルバイトをしている学生がいます。そういう二極化現象がありますが、全体的には、それほど経済状況に対して厳しい感じを持っていないということがわかりました。

最も興味深いところは、留学に関するところです。私は大学で、海外留学を希望する学生の奨学金関係のアドバイザーを10年以上務めていますので、申請がだんだん減ってきていることを実感しています。留学に関する調査は、今回が初めてでしたので、その推移が分からないので一般化できないかもしれませんが、応募者の傾向としては、男子学生からの応募は少なく、女子学生が大半を占めています。

留学希望者が相対的に減った理由としては、当然ながら経済状況の影響が大きいとともに、語学力への不安があげられると思われます。大学としてこれから重要なのは、短期でも長期でも、留学意欲を持った学生を育てるということであり、今後はこの点が課題になってくると思われます。

桂　今回の調査結果は、10年後、20年後の学生生活を考えるときに、非常に大事なことを示唆しています。調査結果はあらかじめ予想していたとおりですが、問題はその数字の中に隠されている学生生活の内面的な問題です。これは、調査結果を見て考え直さなくてはいけないと思いました。

特に、先ほど平山先生がおっしゃったように、男子学生と女子学生で大きな違い、差が生まれていること。もう一つは、私た

ちは学生の経済状態がほぼ安定したと思っていましたが、実はまだまだ困難な経済状況にある学生が多く、格差が広がっているということを、この調査から感じました。

4年ごとの推移、自大学の学生像との比較

阿藤　この調査の優れている点は、4年ごとに実施していることから、過去のデータと比べた変化が読み取れるところだと思います。新規に加わった留学に関することや朝食の摂取状況を除いては、過去にさかのぼってデータを比較し、非常に分かりやすくまとめてあるため、学生がどのように変わってきたかを読み取ることができます。

とくに私が気になったのは、学生の喫煙と薬物に関する状況です。喫煙する学生自体は以前よりもかなり減っているという結果が出ています。普段ずっと大学にいると、学生の変化に気付きにくいものですが、それが読み取れる資料として非常に貴重だと思います。

今回の調査から学んだことも多くありましたし、所属大学と全体を比較して、わが校にとって大事なことも明らかになったので、今後の対応を考えていきたいと思っています。

岩崎　私も、すでに先生方から指摘があった留学と経済状況に関する項目が気になりました。本学は女子大学ですが、女子学生の留学希望が多いというのは、まさしくそのとおりで、大学を選択する際に、留学が判断材料の一つになっているということを、学生と面接する中で実感しています。調査結果が実際の学生の動きを反映していることを確かめることができ、非常に興味深く感じました。

もう一つは経済状況について、数値の上ではそれほど困窮している学生が見えないというお話がありました。本学の場合は、多くの学生がＪＡＳＳＯ（独立行政法人日本学生支援機構）の奨学金を受給しています。それでも足りずに、学内の奨学金も二重に受けている学生も決して少なくなく、二極化という言葉が、まさしく当たっています。何度も留学をしたいという学生がいる一方で、家庭の事情で昼も夜もアルバイトをし、それでも厳しいという現実があります。私が学生支援部にいた時には、奨学金の面接でそれを強く感じました。

大学の就職支援があまり活用されていないのではないかという指摘がありました。キャリア支援課に聞いてみると、大学の就職支援だけでなく、他にもまったく相談していない学生がいるのではないかという話がありました。大学にとって出口となる就職にはとても重きを置いて対策をとっているので、この結果から何が読み取れるのかは今後も考えていく必要があると思います。

難波　いろいろな論点を出していただいた中で、多くの先生が経済状況に言及されました。各先生方の大学のご事情や、普段学生に接していて感じることなど、もう少し詳しくお話しいただけますでしょうか。

北條　調査結果からも、２０１０年の調査結果と比べると若干良くなっているということが感じられます。私の大学でも、経済的な理由による退学は減っており、全体的には良くなっていると思います。

ただ、経済的により厳しい状況にある学生が目に付くということはあります。ＪＡＳＳＯだけではなく、学内の奨学金の活用

も考えなくてはいけない。学内のいろいろな奨学金制度の中に、家計急変型という仕組みがありますが、大学入学前からそれなりに厳しい経済状態にある場合、急変という扱いにならないこともあるようです。もっと学生の経済状況を的確に把握して、何とかするような仕組みが必要なのかもしれません。そもそも、家庭環境をはじめとして学生が日頃置かれている環境を大学は把握することができていません。

また、そうした経済的に厳しい学生と、学業成績の面で指導が必要な学生との間には相関関係が高く見られます。学生が大学生活を営んでいく上で、経済状況が大きな影響を与え、重大な問題になっていると思われ、学費が払えないといった事態とともに、家庭内の複雑な問題や、アルバイトが忙しすぎるといったことが勉学に支障を来している学生も結構多いと言えます。

北條 英勝氏

経済状況がもたらす学業への影響

平山 なぜ日本には給付型の奨学金がないのか、以前から奨学金問題に興味がありました。今は、例えば両親が離婚して主たる家計支持者があまり家にお金を入れないために、急に勉学を続けられない状況になったり、家計支持者が勤務先の倒産やリストラで失業したという学生など、家庭環境の変化がすぐに勉学に影響するという非常に厳しい状況になってきたと思います。

平山 令二氏

朝の1時限目の教室でいつも寝ている学生がいるので、どうしたの?と聞いてみると、昼も夜もアルバイトを掛け持ちで毎日やっていて、授業料も生活費も自分で賄っているので勉強する時間がないと言うのです。これはやはり勉学の質に非常に影響するでしょう。そういう学生が、調査では経済状況が厳しいと答えていなくても、実はアルバイトによって勉強時間がかなり浸食されているという現状があるのではないかと思いました。

桂 経済状況の二極化の問題は、やはり今の新自由主義以降ですね。経済階層的に非常に恵まれた学生とそうでない学生の差が

桂 良太郎氏

どんどん広がっているということを、この調査をきっかけにしっかり読み解かなくてはいけないでしょう。

個々人に着目したよりきめ細かな学生支援の必要性

桂　留学に関する調査結果を見ると、圧倒的に女子学生が多い。これは何も日本だけではなく、世界中で起きている現象です。先ほど、大学生の生徒化という言葉が出ました。心理学者のエリクソンによると、青年期の経験がその人の発達に大きな影響を与えますが、男子学生が非常に委縮している様子が強くうかがえること、これが、今回の調査結果から読み解かなくてはいけない大事な点だと思います。

阿藤　正道氏

　また、留学したくても、経済的にできないという悩みを持つ学生については、私は「夢とゆとりと勇気を持ちなさい」といつも話しています。本当のゆとりとは、お金や物ではなく、人間関係だというようなことを一人の教師として教えたときに、女子学生はそれを非常に早く受け止め、お金がなくても頑張って留学しようという気になってくれますが、男子学生は全然元気がありません。しかし、これは日本だけではないようでもあります。

阿藤　私は学生部長を務めていますので、奨学金の申請書類をよく目にする機会があります。家計急変、あるいは教育ローンを借りている学生向けに利子補給の奨学金もあり、支給額はわずかですが、そういうものにも申請する学生が結構います。申請書類を見ると、かなり家計が苦しく、無理をして借金をして大学に来ているようです。大学1・2年生の時点でローン残高が400～500万円もあって、おそらく高校の頃から借りているのでしょう。

岩崎　日出男氏

　一般的には景気が良くなり、就職も内定が早く出るようになって少し好転しているイメージがあります。しかし、今回の調査結果からみた経済状況については、学生の親は依然として厳しい家計状況の中で無理をしながら大学へ送り出しているようです。仕送りも増やせないため、学生はアルバイ

難波　功士氏

トで何とかしのいでいるという様子が、この調査結果からも見て取れると思います。

留学するには、やはりお金がかかります。留学したい学生はそれなりにいて、大学の提携校であれば比較的安く済むと思いますが、留学する年は通常の学費の2倍の負担を背負うこととなり、それが可能な学生がどれだけいるかということです。留学に関しても、給付型の奨学金があればいいと強く感じます。

私の大学でも、留学となると敷居が高かったり、お金もかかるので、短期の語学研修などのプログラムも用意していますが、その応募者は圧倒的に女子学生です。

平山　米国の大学への留学生を受け入れる機関の日本人担当者のお話が印象的でした。米国の大学における留学生は、以前は日本人が一番多かったものの、今は中国、インド、韓国が多く、その理由は、費用の問題だそうです。米国の大学で学ぶには年間800～1000万円を要するため、それが払えなくなったのが日本の留学生が減った理由であるとのことです。やはりそうだったのかと驚きました。意欲だけではなく、中心はお金の問題だという気がします。

岩崎　先ほども申し上げましたが、女子大学でも留学への高い意欲が見られますが、やはり二極化傾向にあるように感じます。本学の提携先はニュージーランドの大学で、渡航費用だけでも随分とかかりますが、毎年多くの応募があり、その中からさらに1年間留学したいという学生が必ず数人は出ます。学生との面接でも、本学に海外の宿泊研修施設があって、比較的リーズナブルな費用で海外体験ができるので本学への入学を希望したという話を何人もの学生から聞きました。女子学生の留学意欲はもちろん高いのですが、そこには経済的な理由もあると思います。

経済的な面では、例えば除籍の理由は幾つかありますが、そのほとんどが学費の未納であるという現実がその背景としてありますので、学生は一所懸命頑張っていたのにと、いつも思います。

表面的には経済的な明るさが少し見えたと言いながら、現実はなかなかそこまではいっていない。依然として厳しい状態があることをさまざまな場面で実感します。

学生を取り巻く「私事化」「個別化」「多様化」

難波　そういった厳しい社会状況の中でも、政府は、大学教育に関してグローバル化、国際化を大きなスローガンとして掲げています。それにどう対応すべきかまで含めて、今回の調査結果からは離れるかもしれませんが、お考えをお聞かせください。

桂　高度経済成長以降、家族のライフスタイルが多様化して、「私事化」「個別化」がどんどん進んできました。そういった多様なライフスタイルの学生が安心して勉学できる体制が大学で整っているかというと、そうとも言い切れない現状があります。どうしても、階層の高い学生がチャンスに恵まれるという現状を、私たちは見逃してはいけないと思います。

もう一つは、学生も一人ひとりが非常に多様化しています。個別化しているし、私事化している。私学は、戦後三つの大きなタームがありました。最初は超エリートが大学で学んだ時代、それがやがてマス化して、高度経済成長になり、その後、経済が

混迷し、ほとんど経済成長が見込めない時代になって、多様な学生が私立大学にいろいろなものを求めてきました。

こういう状況で、私たち私立大学に携わる者にとってのキーワードは「多様化・私事化・個別化」だと思います。多様な学生、個別的な問題を抱えている学生、それから私事化している家族の状況を抱えている学生、をいち早く把握することの重要性を、この調査から読み取らなくてはいけないと思います。

北條　確かにおっしゃるとおりで、大学は多様性に満ちています。私の大学は女子大学を共学化しましたが、ここ10年ほどで学部学科が非常に増えて大規模になり、多様な学生が入っています。

特段の支援を必要としない学生が多数ではありますが、経済的または家庭環境的な問題や、学習支援が必要な学生も少なくありません。そういった現状に対して、多様な支援策を用意しないと、いろいろなところで学生がつまずく事態が起こるわけです。

桂先生がおっしゃるように、非常に個別的な対応をしなければいけない。学生を個別的に把握しつつ、総合的に支援する枠組みが、今求められていると痛感します。

特に、男女の差が極めて大きいですね。女子のほうが非常に意欲的な学生が多く、男子学生は一歩引いていて目立たない印象がありますが、それが調査結果でもいたるところに感じられます。多様性を増している学生の姿があり、それに対して個別的、総合的な視点からの支援が求められていると思います。

難波　多様化しつつ、最初に北條先生がおっしゃったように、真面目化といった傾向が確かにあるようですが、その点についてどうお考えですか。

北條　全体的には、本当に真面目で、こんなに毎日きちんと大学に来るのかというくらい、大学に来るのが当たり前になっています。私が学生だった時には、真面目に毎日登校する学生といつもいない学生に分かれており、教員も出席を取りませんでした。

現在の大学の状況に、多くの学生が適応しているとは思いますが、微細に見ると多様性が増していて、決して一枚岩ではないわけです。

「真面目」≒「没個性」

桂　学生には、少し極端ですが、3種類あると思っています。

まずは「こちらが言ったことをきちんとやる学生」がとても増えたように思います。一方で「こちらが言ったことを全然聞いていない学生」は少なくなり、良いことなのですが、「こちらが言わなくてもやる学生」も少なくなってしまいました。

北條　そういう意味での主体性や能動性は、実は低下してきているのではないか。そういう学生が少ないことは確かですね。

桂　真面目化しているけれど、没個性的と言ったところでしょうか。

北條　もっと自分の興味関心に従っていろいろなことを自主的にやり、教員が言うことの先回りをする、そういう学生は少ないです。

平山　それもやはり二極化しているような感じがします。私が知っている3年次の学生は、休学してカンボジアで1年間、学校づくりのボランティアをやりたいと言って現地に行きました。彼は高校を卒業してす

ぐに進学せず、社会人を経験しました。働く中で、大学で学ぶことの意味を考えたのではないでしょうか。自分で学ぶ目的を見つけて自分でやっていく学生もいます。

気になるのは、先ほど北條先生がおっしゃったように、真面目になった。しかし、教室の後ろのほうにぽつんといて、声を掛けても反応がない学生が増えています。そういう問題はどこから来るのか、今考えているところです。

阿藤　学生の姿勢は少しずつ変わっていると思います。例えばゼミでも、「こんな文献があるからみんなで読みましょう」と、私にも難しすぎるものを持ってくるような積極的な学生が、10年くらい前にはいました。最近は、言ったとおりにしてくれればまだいいほうで、好きにやるように言うと本当に何も動かない学生が増えているような気がします。

岩崎　本学は出席管理を厳しくしていますが、学生の真面目さというものが、昔の真面目さとはニュアンスが少し違うように感じます。大学に来て、空いた時間を持て余すことに何かしら不安があるようです。若者言葉で「リア充」という言葉がありますが、そういうようなことが見え隠れします。

孤立化を恐れる「大学生徒」

岩崎　学生担任の教員から「授業で座席指定をしてください」と言われたことがありました。普通は座席指定などしないので、学生は仲のいい友達同士で座ります。そうなると仲間のいない学生が一人ぽつんといて、本人はそういうふうに他人から見られるのが嫌だと言うのです。出席番号順に座るとそんな心配がなく、安心して授業にも出られるというのです。私には思いもよらないことでしたが、その後は学生の顔を見ながら、このクラスは出席順にしようといった工夫をするようになりました。

このように、学生の気質が以前とはずいぶん違いますから、個別的な対応が、今、最も求められています。また、職員も学生の個別対応に追われて、それが業務上の大きな負担にもなっていると感じます。

難波　先ほど、「学生の生徒化」というお話が出ましたが、大学生が生徒化した社会的背景や、そういう学生が増えていることにどう対応すべきか、また実際にどんな対応をしているかといった点についてお聞かせいただけますでしょうか。

北條　あれこれ指示するとすぐにやる学生が大半だというのは、一見すると授業運営がとても楽です。しかし、学生は必ずしも自発的にやっているわけではなくて、やらされているという部分があると思います。そういう意味では、能動的・主体的な大人になっていない部分があるのかもしれませ

ん。やはり、自分がやらなければ前に進まないような形にすることが大事です。

求められる主体的、自発的学修態度涵養のための仕組み、仕掛け

北條　課題を与えるにしても、ややもすると、われわれも安易なほうに流れますから、無理にでもやらせるような形になりがちですが、自分なりに考えて、いろいろやらないとついていけないような仕掛けが、本当は求められているのかもしれません。授業の科目や学科によって全然違う問題ですが、そういう工夫が必要ではないでしょうか。

　学生の勉強時間の不足が言われ続けており、それをどうするかということで、私の大学では自学自習体制の構築が話題になっています。教員は毎回課題を出し、それをこなさないと授業についていけない仕組みを整備する方向です。あるいは、反転授業など、従来のやり方と変え、授業ではディスカッションや作業をする部分を増やし、自学自習を授業の前提とする試みも部分的に始めています。まだ課題がたくさんあるし、これをやっていくためには先生方も意識を変えていかないとなかなかできません。今までとはやり方が違うので、学生が主体的に学ぶシステムを作るためには、教員をバックアップする仕組みまで含めてやっていかなければいけないと考えています。

難波　各大学、各学部、各学問領域でやり方が違うと思いますが、学生の変化に対応してこうしたことをやっているといったお話はありますでしょうか。

平山　そこが一番難しいのですが、東日本大震災の後で、学生を引率して気仙沼にボランティアに行ったときに、今までの授業のやり方ではまずいと強く感じました。というのは、こういった大きな変化の時に、大人も若者も含め、きちんと判断できる社会でないと危ないと痛感したからです。

　そこで、ささやかな試みですが、1年生のある授業で、それまではテキストを読んで発表させていた方法を一切やめ、全部討論にしました。例えば、私はドイツが専門なので、ドイツと日本の原発政策とか、集団安全保障、その後はＩＳ（イスラミックステート）など、答えのない問いをテーマとして議論することをやっています。うまくいかないときもありますが、例えば昼食会を開き、学生同士が知り合いになると、自由に話せるようになります。今の若者気質と言うか、知らない人の前では話したくないけれど、顔見知りになると思ったよりいろいろな意見が出て、それなりにうまくいっているのかなと思います。

桂　今回の調査で、朝食に関する質問がありました。学生部の仕事をしていて、先ほど個別化と私事化と多様化というキーワードを出しましたが、やはりこれからの私立大学は非常に多様な学生を受け入れるようになります。国立大学はある意味で画一化した学生ばかりかもしれませんが、私立大学がいろいろな個性や気質を持つ多様な学生を受け入れていくためには、学生の孤立化を防がないといけないというのが、今回の調査から私が学んだことです。おそらく、朝食をとっていない学生が孤立化している傾向が高いのではないでしょうか。

　また、男子学生は特に大人しく、私事化している。私が一番心配なのは、私事化してもいいから孤立化しないために、われわれは学生をどう支えていかなくてはならな

いかということです。

相談する機関や相談相手、それらをもっと充実させるように、政府に求めなくてはいけないという気がしました。さらに、グローバル化して留学生がどんどん入ってくることになりますので、外国人学生の孤立化をどう防ぐかということも、これからの私立大学の課題の一つだと思います。それぞれの言語で対応していけるスクール・ソーシャルワーカーの養成が大事でしょう。

孤立化防止のためのサンマ（三つの間）とホウレンソウ（報連相）

桂　私はよくサンマとホウレンソウと言います。サンマは「時間・空間・仲間」の3つの「間」で、仲間ができたら集まる時間と空間が必要です。大学のキャンパスづくりでも、コモンズとか、そういうスペースに関する課題があると思います。

ホウレンソウは「報告・連絡・相談」で、私が言いたいのは、スマートフォンではなくて実際に会って友達をつくろうということです。今はＬＩＮＥなどのようにＩＴ化され、流言のために友人関係がどんどんつぶれていってしまうということが起こりやすくなっています。そういう意味で、もう一度これまでのアナログ的なことを見直しつつ、カリキュラムや課外活動のプログラムも、そういう方向で設計しなくてはいけない時代が来たような気がします。

阿藤　悩みごとの相談相手は家族や友人がほとんどで、大学の教職員や学生相談室の割合は非常に低いという調査結果を見ますと、1年生には、もう少し相談してほしいと思いますが、考えてみると、今の学生が連絡を取る手段は電話ではなくＳＮＳ、ＬＩＮＥなどが多くなっています。酒を飲みながらじっくり話すような機会が昔に比べると減っており、大学の教職員とも直に話をする環境は意外にないのかもしれません。

私どもの大学では、1年生は入門ゼミナールの履修が必須です。1クラス20人くらいで、半期だけですが、担任を付けています。現役で入った新入生がかなり多く、特別入試と一般入試が半々で、一般入試で浪人して入った学生はほんの数名でした。その浪人して入ってきた学生と現役の学生の差を、非常に感じました。一度社会に出てから大学に来た学生は意識がだいぶ違うというお話がありましたが、一浪しているかどうかでも違います。今は、浪人して入ってくる学生はかなり珍しくなりました。現役生は、1年生の前期では本当に生徒というか、高校の延長のようなところがあり、一浪や二浪した学生とは、意識が違います。

語学でも、本学にはいろいろな学部があり、英語が非常によくできる学生もいれば、入試の制度によっては英語のレベルが低い学生も入ってきます。新学期早々に新入生にテストをして、能力別のクラスを編成しますが、実力が中間のレベルでも差があるので、対応するのに苦労します。

今回の調査の「身に付いたこと」というところでは、語学系の項目が意外に思わしくない結果であることが明らかとなりました。理系と文系でも違うと思いますが、私の経験では、理系の学生、特に私立大学では、数学や物理、化学はよくできても英語はさっぱりだという学生が結構います。人文社会科学系の学生でも、期待したほどは大学で語学の実力が身に付かないのかなと思いました。

幅広いレベルの学生をまとめて面倒を見ているということもあるし、ゼミで外国の文献や外国人の留学生と触れるチャンスも、まだ少ないのかもしれません。そういう点で、伸びる人をちゃんと伸ばせるような環境作りを、これからも考えていかなくてはいけないと思いました。

学生が自ら考え、踏み出す勇気を与える体制づくりの必要性

岩崎　学生がなかなか相談しないということですが、相談したいという強い思いがないと、人間は誰かに相談しません。言い方を変えると、相談するにも体力が必要だと思います。キャリア支援の担当者に聞くと、今の学生は声を掛けてもらうまで動かないとのことでした。つまり、相談以前の問題なのです。学生の外に向かう力が、しぼんでしまっている。本学でも、就職に関する学生の行動が遅いですね。教員が思い余って声を掛けたり、あるいはキャリア支援課の課員が声を掛けたりして、やっと動き出すという現状です。

では気軽に相談できるのは誰かというと、家族のようです。大学の志望校を決める際に誰に相談したか聞いたら、家族、特に母親という答えが一番多かったという新聞記事を見ました。これを読むと、なおさら学生が受け身だという印象を受けます。

難波　私たちの頃は、大学生になったら放っておいてほしいという気持ちがあったと思います。今は、相手をしてほしいという学生が増えている。向こうから全然アクションをしてくれないのでどう対応すればいいのか、相手ができないという話があったと思います。

就職関係に話を展開したいと思います。就職に関する項目では、「就職できるかどうか」は、前回の調査と比べて減少傾向にありますが、社会人という今までとは全く異なる環境に移ることへの不安は増加傾向にあります。就職状況がよくなっているのかどうかもあわせて、コメントをいただけますでしょうか。

北條　就職率の全国的な推移を見ても、一時期に比べるとそれほどひどくはなくなったと言えるとは思います。若干の改善傾向が表れていますが、ここにも学生によるある種の格差が広がっています。すぐに内定が出る学生は内定を5つも6つももらい、さらにまだ就職活動を続けると言っています。一方で、何社受けてもだめで、途中で諦めたり、いやになってしまう、どうしたらいいか分からなくなるといった学生がいることも確かです。

先ほどからの話とも関係しますが、われわれから見てすぐに就職先が決まるだろうという学生は、実際に早々と決まっていく。逆に、ちょっと心配な学生は動き出すのも遅いし、どうやって動いていいのかも分からない。分からないのなら就職キャリア課に相談に行きなさいとか、私自身も相談に応じると言っていますが、それがなかなかできないという学生の姿があります。特に、4年生になると大学に来ることが少なくなるので、余計に発見が遅れます。そして、まわりが決まっていけばいくほど追い詰められていく。就職率の全体的な数字は好転しているかもしれませんが、やはりそこには二極化現象の進行が見て取れます。

平山　就職については難しいところで、コミュニケーション能力や積極性がある学生

は、ほぼ自身の希望を叶えることができています。しかし、そうではない学生は、それなりの勉強をして就職活動をしても、やはり苦労します。余談ですが、私が今まで教えた学生の中でいちばん印象的だったのは、2人の8年生です。もう10年以上前ですが、普通だったらなかなか就職できない、応募は25歳までという企業に面接に行ったところ、社長が、そういう学生は見どころがあるから来なさいということがありました。今は就職マニュアルや英語力といった決まったパターンで就職することが多いことはしかたがない面もありますが、そういうやり方だけだと、本当の意味でのいい人材は採用できない、8年間苦労した人には8年間で得たものがあるわけで、そういう人も採用できる仕組みになっていかないとまずいのではないかと思います。

正課教育を超えてのパーソナル・ソーシャル・サービス

桂　おっしゃるとおりで、早い時期から就職を決める学生は、あちこちから内定をもらいます。

私はやはり、最終的に孤立化している学生を救わないといけないと思っています。その苦しんでいる学生に寄り添っていけるような相談体制、キャリアであれ生活相談であれ、もっともっと改善すべき点があるような気がします。また、今は就職することが当たり前の社会ですが、やはり、一人ひとりの学生に見合った生きがいの場所を提供していかないといけない。正課の授業だけで卒業させてしまう時代はもう終わりだという気がしました。私はパーソナル・ソーシャル・サービスと呼んでいますが、こういう点をもう少し整えていく必要があると思います。

阿藤　私どもの大学では就職課がんばっているので、学生には、ことあるごとに就職課に相談するよう指導しています。例えば、会社訪問の日程も最近は大きく変わっていますから、そういった就職課からの情報がないと、具体的に動きにくい面があります。大学の世話にならないで自分でやるような学生は、今はあまりいないでしょう。逆に、表に出てこないというか、大学に相談をせず、ほとんど動かないために何も決まらない学生が私のゼミにもいます。学校にも来ないので、フォローができません。また、ひと頃は、入社して3年くらいたつと辞めてしまい、再就職も難しい時期がありました。そこで、本当に自分に合った職業に就けるように、キャリアデザインといったことを始めましたが、それが本当にうまくいっているのかどうか検証をする必要があります。現状はどうなのか、先生方の状況を教えていただければと思います。

岩崎　どこの大学でもされていると思いますが、学科ごと、あるいは学部ごとに就職相談会を設け、キャリア支援課が積極的に、いろいろな形で学生に情報提供や指導をしています。ところが、笛吹けどと言いますか、学生が応えてくれない。相談に行くように促してもなかなか行かないので、その場に学生を待たせてキャリア支援課へ電話をかけ、今電話をしたから行きなさいということまでしないと学生は動かない。本当に受け身になっていて、まるで根の生えたような状態です。

他の大学を見ても、就職率はここ3年で少しずつ上がってきています。本人が希望

さえすれば就職は可能だという状況に、もう今なりつつあります。キャリア支援課からは、学生が本当に動いてくれれば就職はできると言われるのですが、学生自身が動かないのでなかなか就職につながらないという現状です。

それを解消するためには、学生の自主性の涵養ということに尽きると思います。キャリア教育は、もちろん重要です。本来のキャリア教育は2年次か3年次にやればいいのでしょうが、正課の専門科目との関係があって、どうしても1年次にやっているところも多いと思います。それを本学では、実践キャリアプランニングという名称で来年度から2年次にやろうとしています。キャリアについて最も考えるのは2年次から3年次なので、その時期に専門科目と並んでそういった科目を設ければ、少しは状況が良くなると期待しています。

それとともに、学生の自主性を喚起する目的で、学生LA（Learning Assistant）や学生FD（Faculty Development）委員として大学のさまざまなシステムの中に取り込み、学生が一所懸命に活動する場を課外活動として設けるという方向性が特に大事だと思います。

難波　何度も出てきた言葉ですが、学生の受け身化や生徒化という問題がまず一つあり、その一方で、多様化し、私事化・個別化している。それに対して、教務課も就職課もいろいろ考えなくてはいけないことがあると思いますが、これらの点はあとで議論していただきたいと思います。

ここまであまり語られていない論点として、阿藤先生が言及された薬物や禁煙に関する学生指導についてはいかがでしょうか。

脇の甘さが垣間見えて心配な薬物問題

阿藤　最近はあまりマスコミに出なくなりましたが、一時はどこかの大学の構内で薬物をやりとりして学生が逮捕されたといったことがありました。本学では、新入生に対しては、薬物の危険性についてのガイダンスや、保健体育の授業を1時間使ったレクチャーをしています。

しかし、調査結果を見ると、1割弱の学生が、かなり脇が甘いといいますか、自己責任でいいのではないかという意識を持っているようです。今回の調査では大学独自の質問項目を追加で設定することができたので、専修大学では薬物関係や喫煙のマナーについてもう少し詳しく調査しました。そうしたところ、薬物を手に入れようと思えばできそうだという学生が1割前後もいました。今はいつ何が起きても不思議ではないという、薄氷を踏むような思いです。高校の段階でもそういう注意喚起はずいぶん

するようになってきて、ある程度効果は出ていると思いますが、その反面、私たちが思っている以上に蔓延しているのではないか、そういう不安がぬぐえません。絶対にだめだと言い切れる学生が圧倒的に多いのですが、一部にはかなり認識の甘い学生がいるように思えるし、もし問題が起きれば、大学としては非常に厳しい処分をするしかありません。

難波　学業面では真面目になっているはずなのに、意外にも薬物に関するポイントだけがよくありませんでしたね。

阿藤　大多数の学生はキッパリ断るという態度をとっていると思いますが、一部の者ですね。こういう事件では、2万人の学生の中のたった1人が何か起こしても、大学全体の名誉に関わるような事態になります。大学としては厳しい処分をとらざるを得ないし、できればそういうことのないようにしたいと思っています。

北條　阿藤先生がおっしゃったような脇の甘さという点では、2010年の調査よりも2014年のほうが、「絶対に使うべきではない」という学生の数がやや減っている。一時期よりはニュースなどに取り上げられないということの影響かもしれませんが、やはり潜在的には何が起きてもおかしくないという状況があるかもしれません。特にここでも、先ほどの話ではないですが、男女という点では男性のほうが甘いということもあるようです。

難波　皆さんがおっしゃることですが、全般的に女子学生よりも男子学生のほうが精神年齢の低さというか、幼さ感があるようですね。

桂　難波先生のご専門領域である社会学の見地からはどのように考えられるか、ぜひお聞かせください。

〝大人〟になるための唯一の通過儀礼となってしまった〝就活〟

難波　大人になるためのいろいろな通過儀礼がなくなっている現代社会の中で、唯一存在するのが就活ではないかという感じがします。就職、就職と言うのもいやだし、就職のために大学があるのではないのですが、就活ということで脅さないと学生は何も考え始めないし、動き出さない。どうすればいいのか、マニュアルみたいなものを教えてくださいと学生に言われますが、そんなものはない、と。採用する側は、自分で考えて行動できる人間を採ろうとしているのだから、それに対して、どうすればいいか聞きに来る時点でちょっとおかしいと言って突き放します。インターンシップに行こうとしても、倍率の高いインターンシップだと落とされます。そうやって何度か否定されていく中で自己を見つめ直し、実力を客観的に判断してもう一度立ち上がってくる学生はいいのですが、一・二度否定されるとシュンと萎縮して孤立してしまったり、学校にも来なくなるといった、セーフティネットが必要な学生がたくさんいるという実感があります。

岩崎　そういった状況は、女子大学でも同様です。あきらめが早いのかもしれません。

難波　傷付くことへの耐性が、昔よりも低いのでしょうか。かつては頑固な親がいて、地域社会があって先生がいて、否定されたり一方的に怒鳴られるという経験をしながら大人になりましたが、たぶん今の学生はほとんどそういうことがない。生まれて初

めて理不尽な大人に出会い、不採用と言われるのが就活の場で、それに対応できない学生が増えている感じがします。印象論になりますが。

自らを試され、自分に向き合う機会の創出を

北條　先ほど、浪人して入学する学生がずいぶん減ったという話がありました。今は、現役で入って4年間で卒業するのが当たり前のような感じです。難波先生は通過儀礼とおっしゃいましたが、そういった自分を試される機会、あるいは、自分に向き合わなければいけない機会が減っているのかもしれませんね。

難波　大学進学の目的の中で、友人関係をつくるとか青春を謳歌するというのがどんどん減っていると言いつつ、大学に入っても同質な友人関係が築けないと非常にいづらくなるというお話がありました。等質な学生集団の中でうまくやっているから、これでいいものと思っていたところ、それが全然通用しないのが就活の場であるということに初めて気が付く。就活を学生の指導に利用するのはいやなのですが、そういう現実が待っているのに、あなたはそれでいいのかと叱咤して自分から動き始めるのを待つことがあります。しかし、全員が動いてくれるとは限らないという悩みを、われわれは共有していると思います。

岩崎　学生の休学願の理由として、進路の再考というのがよく挙げられます。しかし、よくよく見ていると、他の学生と良好なコミュニケーションをとれなかったというケースが少なくないという印象があります。友達関係をつくろうと思えば、お互いに一歩踏み出さないといけない。声を掛けてくれるまで待っていては、友人はつくれません。

北條　学生たちの関係を見てると、同質というか、同調圧力が強い感じがあります。高校まではクラスがあって、一日中一緒にいてベタベタしているようなところがありましたが、大学では授業ごとにクラスのメンバーが変わりますから、そういう意味ではそれほどでもないはずなのですが、友人同士で仲良くしなくてはいけない、友達がいるほうがいいといった考え方が強いように見えます。逆に言うと、いわゆる「ぼっちメシ」といわれるように、一人で食事をしていると友達がいないように見られるのがいやだということですね。

　先ほどから出ているような孤立化とか、違ういい方をすると大学というシステムにうまく適応できないケースが多くあるように思います。大学生活ってこうだと思っていたけれども、入学してみたら違和感があって、そこにうまく入っていけないという学生を、たくさん見かけます。

岩崎　実学系では、その逆が多いですね。看護や食物栄養といった学科では、1年次から履修すべき科目が多いため、高校の延長のようで、イメージしていた学生生活とは違ったといった声を学生からよく聞きます。その大学生らしさとは何かというのも、やや問題がありますが。

　学生の孤立化は何とか解消しなければいけない問題で、学生相談でも結構多いようです。体調不良や精神的な不調を訴えて学生相談室を利用する学生は、女子大学の場合は割合多いのではないかと思います。本学の相談室も、ここ3～4年で利用者がず

いぶん増えており、減る兆しはありません。そのため、相談に来たけれども先に相談している人がいて、自分の番まで待つ場所がないということで、相談室の控え室を作りました。本学のような規模の小さい女子大学でもそういう状況ですので、学生数の多い大学では潜在的に同様の状況があると思います。

北條　私の大学でも、相談室を訪れる学生が増え、数年前の2倍近くになっているのではないかという感じがします。次第に、十分な対応ができなくなってきており、こぼれ落ちているというか、以前はもう少し面談を繰り返していたものが、今では毎週はできないという状況です。なぜこれほど増えているのかというところをしっかり見ていかなくてはいけないと思います。

難波　学生が相談する一番の相手が家族で、大学の職員はその主な対象ではないはずなのに、相談件数は増えているという事実があるのですね。

岩崎　学生が、それぞれの状況に合わせて、個別に相談相手を選んでいるのでしょうか。本来開いている窓口のほうへは行かずに。

異質なものに出会い、自分を発見し、成長する機会の必要性

平山　そこで少し気になるのは、見ていると、似た者同士で集まるというか、同じ地域出身とか同じ高校とか、そういう友人の質が気になっています。先ほどから、大人になるということ、特に男子学生がその面で弱いという話が出ていますが、やはり異質なものに出会わないと自分を発見できないし、成長できない。その機会が、だんだん減ってきているように思います。

　読書体験も重要です。今は学生が本を読まなくなって、ある雑誌には、最近では本を読む若者はオタクと思われていると書いてありました。学生に聞いてみると、新聞を読んでいるのは1年生18人中1人、たぶん本も読んでいない。異質なものと出会うという、本ならではの体験がないのです。

　3年前にドイツ大使の講演を聴いたことがあります。彼はかつて大学を休学して、仲間と2人でアジアを放浪して日本に来たそうです。日本ではいろいろな出会いがあったので、今の日本の若者もさまざまな体験をしてほしい。たいへんなことや困ることもあるけれど、判断力はそういう中で養われるのだというアドバイスをいただきました。積極的な学生もいるものの、一般的には異質なものと出会うチャンスがだんだん減ってきているでしょう。そういう意味では、読書体験の影響も大きいと思います。

難波　本よりも、SNSのような共感しやすく、共有するものが多い人間関係のほうへ行っている。限られた友人同士で情報のやりとりをして、そこから出ようとしないという感じは、本当によく分かります。

桂　大学の相談体制の中で孤立化する学生は、何も日本人だけではなくて、欧米の学生も孤立化しており、辞めたいという学生が増えているのは事実です。そういった学生に対して、どうすればもっと総合的に支援していけるかということが、これからの課題という気がしました。

　私の大学は全面禁煙にしましたが、ルールは形骸化してしまっています。決められたルールは守れと言い続けていますが、孤立化している学生にはそれなりの悩みがあ

り、それが喫煙行動に表れてしまっているような気がします。ただ、孤立化、非自立化の要素は日本人学生だけの話ではないようで、潜在的な原因には国民性もあるようですね。多言語で対応できる相談体制が必要でしょう。

難波　まだ論じていない点や、ここは再度強調したいということでも結構ですし、今回の調査結果を踏まえた重要な点などを、最後にお話しいただければと思います。

個別具体な対応のための学内総合支援体制を

北條　多様な学生がどんどん増えていることは確かですが、一方で未熟なままというか、大人になりきれず、指示待ちというタイプの、一見すると真面目な学生が増えている。その中で、こぼれ落ちていく学生が確実にいて、孤立というのか不適応なのか分かりませんが、そういう学生がいるということをしっかりと見ておかなければいけないと思います。全体的な傾向をきちんと把握しながら、一人ひとりをしっかりと見るような、しかも、それを総合的な形でできるような大学の支援体制が求められていると強く思いました。学生を、いかに大人にしていくのかというところですね。

　先ほど来、体験というお話がいろいろ出ていますが、私の大学では、来年度から1年次の夏休み前と夏休み中を使って、アクティブラーニングで学生を積極的に外に出そうということを、かなり大規模にやろうとしています。どれくらい効果があるのかとか、学内の体制がどこまで追いつくのかという問題がまだありますが。

　入試の多様化など、学力的にもバックグラウンド的にも、学生は本当に多様です。そういう学生に大学でしっかりと学んでもらうためには、4月に入学してから夏休み前あるいは夏休み期間中を使って、いろいろな形で大学生の水準まで高めていくような学習の仕掛けが求められているのではないか。大学に入学したのだ、これからは大学生だから大人なのだという事実に直面させて、それを受け止めさせるような仕掛けが必要でしょう。

　そのためには、いろいろな調査で実態を量的に把握するだけではなく、個別具体的な学生の姿をしっかりと捉えながら、各大学がさまざまな学生支援の仕組みを考えていく必要があると思いました。

平山　2週間くらい前に初対面のドイツ人学生と話して、非常にショックを受けました。なぜなら、私が関心のあるドイツの現在の政策や脱原発問題、難民問題などについて、的確な意見を持っていたのです。私はメルケル首相を結構評価していましたが、その学生は、こういう問題では全然だめだということを指摘しました。さらに、世論は大事であるが、世論というものは時々大いに誤る。ドイツはナチズムの経験もありますから。世論だけを基準にしないで、自分の意見を持たなくてはいけないというようなことを、2～3時間、話しました。私が昔、ドイツに留学したときにもこういう学生に数多く出会いましたが、社会や政治のことを自分の問題として考えて判断できる学生がいることが、ドイツ社会の強みだと改めて実感しました。

　翻って日本の場合は、1960～70年代の学生運動の後遺症か、若者は政治や社会の問題にあまり口を出すなという雰囲気が

ありました。ところが、被災地へボランティアに行った学生などは、復興には政治や経済や法律といったことが必要だということを理解して、大学で学ぶ意義が初めて分かったと言った女子学生がいます。それらが現実の社会や未来にも非常に大きな影響を与えると気が付いたわけです。

学生が大人になれないという問題ですが、大学生も社会の一員であり、ある意味では未来を変えていく力にもなります。ですから、もっと社会の問題について考え、それを発信するような学生を育てる教育、市民教育というのでしょうか、そういう部分が大学にないと、日本はドイツや諸外国に太刀打ちできないと思いました。

今後の調査では、例えば投票に行くかなど、社会との関わりについて聞く項目を入れてもいいと感じました。

パーソナル・ソーシャル・サービスのための公財政支出の充実を

桂　今回の調査の「身に付いた力、身に付けたい力」の推移では、異文化理解がそれほど達成されていないという結果が出ています。これは気になる調査結果だと思います。今のグローバル化という社会環境のもとでは適応できない学生に対する個別的な対応がこれからは求められるでしょう。

そしてそのためには、相談に当たる人たちの充実を図る政策が必要です。私立大学は多様な学生への門戸を開いているのですから、文部科学省に対して、私学助成をもっと充実させるようにきちんと求めていくべきです。特に、奨学金制度について、貧窮に苦しんでいる学生がいかに多いかということを、今回の調査結果から読み解かないといけません。そういう意味で、今回の調査はたいへん有意義だと思います。

これを基にして、日本私立大学連盟としても、パーソナルなソーシャルサービスをもっと充実させるためには相談業務の専門職の人が要るのであって、そのための財政的な支援をお願いしたいということを政府に訴えていかないといけないと思いました。

阿藤　今回の調査では、科目履修で重視する要因について、全体では専門的な知識が身に付くという答えが一番多かったのですが、わが校ではこの数値がちょっと低いことが明らかとなりました。全体の調査結果と私どもの大学とでどう違うかを分析して、報告書を作っているところです。比べてみれば、学校ごとの個性もずいぶん読み取れるのではないかと思いました。

正課外活動では、学生の孤立化などいろいろな問題があるようですが、調査結果を見ると課外活動に参加している学生が意外に多い。しかも、２００６年や２０１０年に比べて、少しずつですが増加傾向です。

大学では自己点検をやりますが、そういうところでは課外活動はあまり重視されていないような気がします。学生の立場からは、ある程度充実した課外活動ができるということも非常に重要で、そういう点で参加する学生が増えているということは意外でしたが、いいことだと思います。大学のほうで、干渉するという意味ではなく、いろいろ支援したり運営したりする体制が、まだ旧態依然とした状態です。新しい校舎を建てる場合も、どうしても教室や研究室が優先で、部室関係は後回しになってしまう傾向があります。

ボランティアに関わりたいという学生も

結構増えていますが、私どもの大学では、災害救援のボランティア養成を始めました。震災がきっかけとなって、人の役に立つ活動やボランティアに参加したいという学生が増えており、学生の意識が少し変わってきたという気がします。

今の大学生は、震災時にはまだ高校生か中学生だったでしょう。そういう時期に体験したことによって、２００６年頃の調査と比べて、意識が変わってきたようです。

身に付いた力の実感は実体験からこそ生まれる

岩崎　大学生活では、よい友人関係が微増している一方で、人脈づくりというものを見ると、友人関係は既に自分と同じカラーの人間でまとまっているから、それ以上の友人関係を作る必然性がないのかもしれません。その一方で、就職のことが念頭にあるがゆえに、あえて人間関係を作ろうとしている姿が見えるように思いました。

「身に付いたこと」では、ボランティア活動に参加している学生の数値が非常に高くなっています。これを見て、やはり身に付いた力を実感するのは実体験なのだと思いました。それがあって初めて、身に付いた、こういうことを勉強したのだと分かる。つまり、実感がないものに関しては、身に付いた身に付いていないということを思えないのかもしれません。これは人間としては自然なことだと思いますが、やはり学ぶということの必然性が問われているというべきではないでしょうか。大学教育がそういうものを提示できるのかということを問われていると感じました。

昨日、ニュージーランドに1年間留学すると決まった学生と少し話をしました。彼女が言うには、「いろいろな人から話を聞いて、毎日、新聞を読んでいます」とのことでした。その理由を訪ねたところ、向こうに行ったら必ず日本の社会について問われるからです、と。その学生は意欲的な学生ですが、これまで社会問題については特に関心を持つようなことのない学生でした。要するに、彼女にとって新聞を読むということの必然性が、留学が決まって初めて生まれたわけです。これは、私にとって非常に印象的なできごとであり、異文化を体験するということの醍醐味だと思います。ですから、実感を伴った学ぶことの必然性というものを、大学が学生にどれだけ提示できるのか。それが、いろいろな意味で問われていると思いました。

難波　本日は調査の話から始まって、いろいろな話題へ展開していって興味深かったと思います。

調査結果では平均値が出るので、学力にしろ経済状況にしろ、両極分化とか二極化という話になったときに、データではそれほど変化はないから問題ないと思える場合もあります。しかし、本当は個別に見ていかなくてはいけないということ。その一方で、長期的なトレンドを探るには、この調査結果は非常に役に立つ。これが絶対ではないものの、自分の大学との違いを見るとか、いろいろな活用の形が考えられます。

桂先生もおっしゃっていましたが、二極化した両方の学生にも門戸を開くのが私立大学の特徴でもあり、それが私たちの大きな使命だと改めて思いました。